紅茶会報 4

2008 No.324

目次 CONTENTS

イギリスへ渡った茶（1） 1
海外トピックス 4
コロンボの2008年2月、3月海外市況 8
主要国茶生産量 9
平成20年２月輸入先国別輸入数量と金額 10
　1．平成20年２月紅茶輸入数量・金額 10
　2．紅茶（3kg以下直接包装したもの）輸入先国別輸入数量・金額 10
　3．紅茶（バルク）輸入先国別輸入数量・金額 11
　4．インスタント・ティー輸入先国別輸入数量・金額 11
　（参考）部分的に発酵した茶（ウーロン茶等） 12
　（参考）緑茶・3kg以下直接包装とバルク合計 12
2007年（1-12月）（確定値） 13
茶にまつわる話
　世界一の紅茶消費を誇る北ドイツ（Ⅱ） 15
本　会　便　り
　1．中国産食品輸入28%減 16
　2．景気「踊り場」入り　経財相表明 月例報告を下方修正　企業部門に陰り 17
　3．米貿易赤字0.6%増　原油急騰響く 輸出入とも最高１月 17
　4．消費支出3.6%増　１月、自動車などけん引　家計調査 18
　5．２月の百貨店、うるう年効果と食品大幅伸長目立つ（協会） 19
　6．協会の活動（第５回資格認定委員会について、第２回ティーアドバイザー養成研修、
　　19年度養成研修（３級）資格認定証書授与式、19年度第３回理事会の開催について、
　　FOODEX Japan 2008に伴う特別会員の関係行事、賞味期限ガイドラインについて、
　　他） 20
　7．業界の動向（日銀短観 民間予測　景況感、大幅に悪化へ　原油高・円高が収益圧迫、
　　大企業景況 9.8ポイント悪化　04年以来最悪 原料高 収益を圧迫
　　１－３月法人予測調査、企業業績 減速感強まる 10－12月 GDP下方修正の公算、
　　街角景気「悲観」強まる　消費者・企業の心理悪化、米景気、
　　減速鮮明に　地区連銀報告 利下げ環境整う　消費冷え込み、
　　２月の清涼飲料カテゴリー別実績、他） 22
英国ティーカウンシル選定（アウォード・オブ・エクセレンス） 29
紅茶セミナー開催状況 30
日本紅茶協会「おいしい紅茶の店」
　喫茶 TEA PORT 36

日本紅茶協会

〒105-0021 東京都港区東新橋2-8-5　TEL 03(3431)6509　FAX 03(3431)6711

関西連絡所　〒530-0051 大阪市北区太融寺町2-22 梅田八千代ビル内　TEL 06(6311)7780　FAX 06(6311)7781

Home page http://www.tea-a.gr.jp/

イギリスへ渡った茶（1）

冨　山　八　十　八（とみやま　やそや）
元ブルックボンドハウス総支配人

はじめに

アジアで広く行われていた喫茶の風習が17世紀にヨーロッパへ渡って、特にイギリスでは広く愛飲されるようになった。やがて紅茶の飲用はイギリスの文化のひとつして世界に広まった。この紅茶の歴史については角山栄先生の『茶の世界史』（中公新書）をはじめ先学のすぐれた諸研究があるが、ここではその歴史を社会的、経済的な側面に重点をおいて見てみたいと思う。

東西交渉

茶の生産と喫茶の風習は中国で早くからはじまり、７～10世紀の唐時代にその政治的文化的影響圏にあった韓国、日本、東南アジアからチベットや西域にも伝わった。しかしヨーロッパ人が茶について知るのは、彼らが直接にアジアへやって来てからのことだった。

アジアとヨーロッパとは古くから交渉があった。ローマの使節が唐を訪れているし、13世紀の元帝国はユーラシア大陸の北方の東と西をつなぐ陸路に駅逓を整備している。

マルコ・ポーロは13世紀末にこれをたどってペルシャから元の上都（北京）にやって来て、帰りは中国の泉州から海路ペルシャにいたっている。

15世紀半ばにオスマントルコが東ローマ帝国を滅ぼし、トルコ帝国を通過する物資に高額の関税をかけたので東西の物流は支障をきたした。

キリスト教のヨーロッパ諸国とイスラム教のオスマントルコとは11～13世紀にヨーロッパからの十字軍派遣のように不仲な関係にあった。そのなかでトルコとの交易は唯一イタリアのヴェネチャ共和国が独占し、ここからアジアの産物はヨーロッパ各国へ運ばれ、ヴェネチャ共和国は巨利をえることになる。

ヨーロッパにとってアジアのスパイスが重要だった。家畜は冬になると餌の草がなくなるので、冬の前に塩漬け肉とされるが暖かくなると腐敗臭を帯びる。それをスパイスによって消す。またスパイスはペストなど大流行した恐ろしい伝染病の予防になるといわれたので貧富を問わず高い需要があった。

そこでオスマントルコの通商妨害の壁を越えてアジアとの直接交易がヨーロッパ人の悲願となった。

15世紀末から16世紀初めにかけてヨーロッパ人による地理上の「３大発見」と続く「大航海時代」によって、ヨーロッパ人は直接アジアと交易することになる。

はじめにアジア交易に乗り出すのはポルトガルとスペインで、ポルトガルはアジアの香料交易で巨利をえ、スペインはアメリカの銀で繁栄する。やがてイベリア半島の２国の繁栄はオランダとイギリスにとって代わられる。

中国の茶はこの2国の東インド会社によって本格的にヨーロッパへもたらさることになる。

コロンブスのアメリカ発見

1492年10月12日、イタリア・ジェノバのクリストファー・コロンブスはスペイン王の援助をえて大西洋を西に向かい、37日目に現在の西インド諸島の彼がサン・サルバドールと命名した島に到着した。

コロンブスは地球球体説によって大西洋を西へ向かえばインド（アジア）に達するとの計画を、最初はポルトガル王に提示するが、すでにアフリカ・ルートの探検を行っていたので採用されず、隣のスペイン王家へ持ち込みイザベル女王とフェルナンデル王の援助をえた。両王はコロンブスの計画を王室事業として行い、コロンブスは航海利益の１割を得る協定を結び、両王のカタイ（中国）王あての親書を携えてスペインを出航したものである。その後もコロンブ

スは2回航海を行った。

トルデシリャス条約

コロンブスのアメリカ発見によってローマ法王アレキサンデル6世は大西洋上の緯度によって、西はスペイン、東はポルトガル領と地球を2分した。翌1493年、スペイン・ポルトガル両国は「トルデシリャス条約」を締結、法王裁定線を修正してベルデ岬沖約550kmを通る線とした。

ヴァスゴダ・ダ・ガマのインド航路発見

ポルトガルの「航海王子」エンリケ王子は1415年、ジブラルタル海峡に面したモロッコのセウタを占領、制海権をイスラム教徒から奪った。その後ポルトガルは西アフリカに何回も遠征隊を派遣し、1488年にバルトロミュー・ディアスが喜望峰を発見した。

ヴァスコ・ダ・ガマは喜望峰ルートで1498年にインド西海岸のカリカットに到着、翌年リスボンに帰った。

これによってヨーロッパ人にはインドが西と東の2つとなり、喜望峰から東を「東インド」、メキシコ湾に面した島々を「西インド諸島」と呼ぶことになる。

オスマン帝国下で香料貿易を独占し巨利をえていたヴェネチャ共和国は、コロンブスがアメリカから持ち帰ったのは原住民だけで香料がなかったことに安心したが、ヴァスコ・ダ・ガマが香料を持ち帰ったことにショックを受けた。

その後ポルトガルは毎年インドへ船団を派遣、カリカットを拠点とし、1510年にはゴアを占領して総督（副王）をおき、東インド経営の根拠地とした。

イエズス会

宗教改革に対するカトリック側からの対抗宗教改革としてパリにザビエルらにより「イエズス会」が生まれた。

ポルトガルは新発見の航路と貿易権の独占、原住民を奴隷化する権利が欲しくて、一方、法王庁は海外での布教のためにポルトガルの海外進出が魅力である。両者の利害が一致して、法王庁は新発見の土地での布教保護者の権利をポルトガル王に与えた。

ポルトガル船にはカトリックの宣教師が乗り組み上陸地の住民をカトリック教徒とするとともに、詳細な現地の報告書をゴアとリスボンに送った。

ポルトガル人は1543年に種子島に漂着し、6年後の1549年にはザビエルが鹿児島にやってくる。やがて日本でのキリスト教布教はイエズス会を主として行われることになる。

ポルトガルの香料貿易

ポルトガルは東インドの香料貿易を王室独占事業として巨利をえる。

当時のヨーロッパからの輸出品としては毛織物が主であったが、毛織物は香料産地の東南アジアではでは不人気で、人気があるのはインドの綿布だった。

そこでポルトガルは本国から持参した銀でインドで綿製品を求め、それをもって東南アジア諸国で香料と交換した。ポルトガルは銀産出の多い日本には中国の絹織物、生糸、陶磁器を運び日本で銀をえて、中国で生糸、絹織物と交換して本国へ運んだ。

アジアの香料貿易の中継地がマラッカで、この重要拠点をポルトガルは手に入れる。

イベリア半島の2国

一方スペインは1519年にはマゼランの世界一周航海を援助する。南米の南端の海峡を通過して大西洋から太平洋に出たマゼランはフィリッピン諸島で原住民に殺される。部下が航海を続け1522年スペインに帰着、3年にわたる航海で世界が球体であることを実証した。フィリッピンはスペイン領となった。

ポルトガルは東インド貿易に必要な銀をスペインの南米産銀に求め、経済的にスペインに依存する関係となる。さらにポルトガル国王がモロッコ遠征に失敗して戦死し、スペインのフェリペ2世が10年間ポルトガルの王位を兼務したため政治的にもスペインに従属することになる。

カトリック国スペインは異教徒のユダヤ人を追放し、プロテスタントが多い毛織物業者に重税を課したので彼らの多くは隣のネーデルランド（現ベルギー・オランダ）へ逃れた。スペインは産業家と金融業者を失うことになる。

アメリカ経営では1545年に南米チリのポトシ銀山を発見し、ここから大量の銀が大西洋側の港に運ばれ、毎年スペインの銀輸送船団によってスペインに運ばれた。

この船団を襲って銀を奪うのがイングランドのドレイクやホーキンズたちで、エリザベス女王は彼らにサーの敬称を許し、その航海に投資したりした。

16世紀から17世紀中葉にかけて南米から運ばれた銀はヨーロッパの銀保有の3倍におよんだ。

16世紀のヨーロッパは人口増加が著しくほぼ2倍となった。過剰人口に食糧生産が追いつかず西ヨーロッパ全体で物価は5倍になるインフレーションとなった。

ネーデルランドでのスペインへの反乱戦争は1566年から1648年まで、途中2回の休戦期間をはさんで82年間続く。

この間1581年にネーデルランドの北部7洲が独立してオランダとなる。

スペインはネーデルランド反乱を支援するイングランドを撃つべく「無敵艦隊」130隻を派遣するが海戦に苦戦し折からの嵐で大損害を受ける。他方地中海では1571年のレパント沖の海戦などオスマントルコとの戦闘が続き、王室財政は悪化していく。「日の沈むことのない帝国」スペインは16世紀半ばから衰退していく。

オランダ東インド会社

オランダは北海のニシン漁から海運業が盛んになり、ポルトガルが運んできた香料をアントワープ港から香料需要の盛んな中部ヨーロッパへ運んでいた。17世紀初めにはオランダ1国の船舶数がヨーロッパ11ヶ国の総数に匹敵するといわれた。スペイン、ポルトガルから逃れてきたユダヤ人の金融力もあった。

衰退するスペインの毛織物工業に代わってオランダが毛織物を優れた海運力で新大陸へ直接輸出し、代価としての銀がスペイン経由でなく直接もたらされるようになった。銀は東インド貿易に不可欠のものである。

1594年に東アジア貿易の遠国会社が設立され、続いていくつもの航海会社が誕生し、それぞれに東インドへ航海に出る。1601年末までに15船隊、合計65隻がアジアに来たが、お互いの競争が激しいために、商品の買付価格は上がり、逆にオランダへ持ち帰った商品の販売価格は下がり、利益の確保が困難になった。

オランダ連邦議会は無用な過当競争を避けるために諸会社の統合を考えた。航海・貿易の自由を標榜する人びとには抵抗があったが1602年3月、「連合オランダ東インド会社」Vereenighde Oost Indische Compagnie略称"VOC"が設立され、連邦議会から東インド貿易独占の特許をあたえられた。

会社には東インドにおける条約の締結、戦争の遂行、貨幣鋳造など国家がもつ権限まであたえられていた。

イギリス東インド会社

イギリスの冒険商人たちは、ポルトガルやスペインが支配する地域を避けて東インドへのルートを探していたが成功しなかった。

1600年12月30日にロンドンの冒険商人たちがエリザベス女王に請願していた「イギリス東インド会社」の特許状が下付された。"The Governor and Company of Merchants London into East Indies"が正式名称である。「東インドと通商する総裁とロンドン商人の仲間たち」の意で、カンパニーが現在の会社という意味になるのは、このイギリス東インド会社の歴史を通じてのことで、この場合は「仲間」という意味だった。「東インド」については喜望峰より東、マゼラン海峡より西と規定されている。これは後発のオランダ会社も同じだった。

1601年にイギリス東インド会社は4隻の船団で喜望峰ルートでアジアへ向かった。船団はスマトラで王と会見できたが、通商は成功しなかった。持参した毛織物は必要とされず、目指す香料の価格は予想より高かった。船団長は当時の常套手段であったポルトガル船を襲い積荷を略奪してロンドンに戻った。この航海の配当金は90%だった。

この1601年の第1回航海から1613年の第12回航海までは、1航海ごとにすべて清算する方式で「個別航海」と呼ばれた。航海にあたっては資金を集め、船や物資を調達し、船員を募集して東インドへ出かけ、帰国すれば積荷から船まで売却して、利益を出資者に分け合う方法だった。